

# 「ヨーロッパ平和運動の母」ベルタ・フォン・ズットナーの業績に関する展示の今日的意義

山根 和代

## 1. はじめに

ベルタ・フォン・ズットナー (Bertha von Suttner) は、ノーベル平和賞を受賞した最初の女性であるが、アルフレッド・ノーベルにノーベル平和賞を創設するよう働きかけた女性でもある。彼女は、作家、ジャーナリスト、講演者として、戦争を扇動する人々や反ユダヤ主義者に反対し、国際的平和運動の先頭に立って行動した。彼女は第一次世界大戦を、次のように予言している。「次に起こる戦争は、これまでの戦争とは比較にならないほど、恐ろしいものになるでしょう。」

彼女の伝記を書いたベアトリックス・ケムフ (Beatrix Kempf) は、ズットナーが様々な国際機関、例えば1889年に議員の国際的団体として設立された列国議会同盟、1945年ハーグに設立された国際司法裁判所、1920年に結成された国際連盟、1946年に引き継がれた国際連合など多くの国際機関につながる平和活動をしたにもかかわらず、無視されて認められていないと憤慨している。

このようにズットナーはあまり知られていなかったが、1993年、国際連盟図書館は「ヨーロッパ平和運動の母」と言われているベルタ・フォン・ズットナーの生誕150周年を記念して、展示パネルを作成した。その展示物はズットナーだけでなく、平和のために活動をした女性に関する展示も含んでいた。例えば1991年にノーベル平和賞を受賞したアウン・サン・スーチー女史などに関する展示である。

筆者がこの展示の存在を知ったのは、1992年に第一回平和博物館国際会議が英国ブラッドフォード大学で開催された際、コーディネーターを務めたDr. Peter van den Dungenを通じてであった。翌1993年にイギリスに留学する機会があり、ヨーロッパ各地の反戦博物館や平和博物館を訪問した際、国連図書館が制作したズットナーに関する展示を見る機会を得た。

2005年にはズットナーのノーベル平和賞授与100周年記念として『平和のために捧げた生涯』という展示物がオーストリア政府によって発行された。日本では

2006年11月に駐日オーストリア大使館、広島オーストリア協会、広島国際学院大学の共催で、広島国際学院大学で展示会が開催された。筆者は、今後、日本の多くの平和博物館・平和資料館でズットナーについての展示がなされることを期待している。

ズットナーはどのようにして平和実現のために生涯を捧げたのか。『武器を捨てよ』は、ズットナーの最も有名な長編反戦小説である。その中では、何が描かれているのか。またズットナーは、なぜ今日でも重要なのか。



『平和のために捧げた生涯』の展示物

## 2. ベルタ・フォン・ズットナーの生涯

ベルタ・フォン・ズットナーは、1843年6月9日に伯爵令嬢として生まれたが、ベルタの母親は市民の出自であり、一度も「上流階級」に属することはなかった。父親は母親より50歳も年上で、彼女が生まれる前

に75歳で亡くなっている。ベルタはプラハで生まれ、幼少期を母親とブルノ（現在のチェコ共和国）で過ごした。彼女は父親の友人であった軍人から教育を受け、軍国主義的な考えを自然に受け入れていた。

1856年にはウィーンに転居し、1873年まで母親と贅沢な社交界の生活を送った。その間ベルタは、数多くの本を読んでいる。ゲーテ、シラー、レッシング、バルザック、デュマ、シェイクスピア、ディケンズ、バイロン、シェリー、テニソンなど、ドイツ、フランス、イギリスの文学作品に触れ、またカント、ショーペンハウエル、フォイエルバッハ、パスカルの哲学書など、毎日読書に数時間を費やした。またドイツ語だけでなく、英語、フランス語、イタリア語を家庭教師から学んだが、抜群の語学力は後に国際的な平和活動をする際大いに役に立った。しかし当時は教養がない女性の方が「チャーミングで女性的」と考えられていた。従ってどんなに美しい女性でも教養があると男性に好まれなかったと言われる。

1864年の夏、ベルタはミングレリア公国（西グルジア地方）のエカテリーナ・ダディアニ大公夫人とバート・ホンブルクで知り合うが、このことは将来ベルタの人生に大きな影響を与えた。

ベルタは三度婚約したが、結婚には到らなかった。お金のために「身売り<sup>(2)</sup>」することを拒否したのである。ベルタの母親は一攫千金を夢見て、カジノで全財産を失った。

ベルタは働くことを決心し、1873年から1875年までウィーンおよびニーダーエスターライヒ州ハルマンズドルフにおいて、カール・フォン・ズットナー男爵家の4人の令嬢のための住み込み家庭教師として働いた。その間、男爵の子息であるアルトゥーア（7歳年下）との密かな関係が明るみに出、同家を放逐された。

1875年の秋、ベルタは新聞広告で得た秘書の仕事に応募し、パリにおいてアルフレッド・ノーベルの秘書になった。当時ノーベルはダイナマイトの発明により大富豪として成功していた。孤独な彼は、魅力的で博識、かつ外国語の堪能なベルタを愛した。（スウェーデン人であるノーベルは、ドイツ語、フランス語、英語、ロシア語に堪能であった。）しかしノーベルに会った八日後、ベルタはアルトゥーア・フォン・ズットナーから「君がいなくては、生きていけない」という電報を受け取り、1876年6月12日、ウィーンでアルトゥーア・フォン・ズットナーと密かに結婚した。

1876年夏から1885年春までベルタはグルジア王の娘に招待され、ズットナー夫妻はそこで9年間生活した。

ベルタは語学教師や音楽教師として働き、夫は工場労働者として働いた。しかし、ロシア・トルコの戦争（1877 - 1878年バルカン半島進出を目指すロシアがトルコに開戦し、トルコを破る）後、音楽や語学に対する社会の関心が低下したため、二人は執筆活動を始めた。またその間様々な書物を読み、特にダーウィン（Charles Darwin）の進化論とバックル（Henry Thomas Buckle）の『文明の歴史』（History of Civilization : 戦争や政治のみを扱う歴史観ではなく、人民や文化などを重視する唯物論的な歴史哲学を唱えた<sup>(3)</sup>）に影響を受けた。彼女は、オーストリアの新聞に連載小説を書き、次第に有名になっていった。二人の間には子どもがなく、生計も苦しかったが、幸福な生活を送っていた。1885年5月、夫の両親と和解してオーストリアに帰国した。書斎にはバックル、ダーウィン、マルクス、ベーベル（August Bebel : ドイツ社会党の創設者で著述家）などの本が精選して置かれていた。

ベルタは1885年10月にベルリンの作家会議に出席し、初めて他の作家との連帯感を強く感じた。彼女はすでに様々な作品を読んでいたが、作家会議で知り合った作家たちの風貌と作品の隔たりに失望し、次のように述べている。「この甘い香りのする愛の歌が、あの野獣のような太った男によって書かれたのか？」

1886年から1887年にかけての冬、ズットナー夫妻はパリに滞在した。ベルタは、詩人アルフォンス・ドーデの家で初めて平和運動について知った。1880年ホジソン・プラット（Hodgson Pratt）はロンドンで国際仲裁平和協会を設立したが、ズットナーは、国際裁判所を設立して紛争を平和的に解決するために世論を高めることを目的とする同協会の趣旨に感動した。彼女は戦争を「非難すべき犯罪<sup>(4)</sup>」であると考えていた。またフランス、イタリア、デンマーク、ドイツ、ハンガリー、ノルウェー、スウェーデンで平和活動をしている人々についても知った。しかし当時平和運動の先駆者はアメリカ人で、1886年には36の平和協会があり、最も古い平和協会は1816年に創られていた<sup>(5)</sup>。

1889年、ベルタは反戦小説『武器を捨てよ』を出版し、平和の重要性を熱烈に訴え、戦争の恐ろしさと悲惨さを写實的に描き出すことによって読者に衝撃を与えた。同書は19世紀に最も大きな世界的成功を収めた本の一つと言われているが、日本ではあまり知られていない。

ベルタは1890年から1891年までベネチアに滞在し、「列国議会同盟」の出席者と接触した。この同盟は第一次世界大戦を防ぐことはできなかったが、1915年ジ

ュネーブに恒久平和のための中央組織が作られ、1919年の国際連盟創設の基礎となった。

1891年10月30日、ベルタらは「オーストリア平和協会」を設立し、2000人が会員になった。その代表として、彼女は11月にローマで開催された第3回世界平和会議に初めて公式参加した。（この時ノーベルは彼女がローマへ行くことができるように、2千フラン程の寄付を申し出ている。）彼女は初めて公の場で演説する機会を得たが、演説はイタリア語で行なわれた。ベルタは会場となった議事堂で演説をした初めての女性となった。

同会議では仲裁裁判所の設立について話し合わせ、1899年のハーグ平和会議に向けての討論の基礎となった。この会議でベルタは17カ国の平和主義者に出会い、国際的連帯感を味わい、非常に感動し励まされたが、さらなる交流を推進するため、スイスのベルンに平和協会の中心となる事務所を開設することになった。スイスとノルウェーの政府は補助金を出し、市民からも寄付を募った。後にデンマーク政府も、平和のために補助金を出すようになり、ズットナーは大いに励まされた。会長はスイスのジャーナリストのエリー・デュコマン(Elie Ducommun：1902年ノーベル平和賞受賞)がなり、ズットナーは副会長に就任した。領土問題が絡むと平和主義者の間でも対立が生じるため、ズットナーは平和運動に政治を持ち込まないように主張し、戦争ではなく、仲裁が必要であることを多くの人々に知らせ、教育の必要性を主張した。仲裁についての当時の考え方は、小説『武器を捨てよ』に登場する父親の考えの形で次のように表現されている。「法律では解決できず、戦争によってこそ解決できることがあるのだ。たとえ仲裁裁判所を設立しようとしても、大国はそれに従わないだろう。」

それに対して、仲裁の重要性は次のように表現されている。デンマークとオーストリアの紛争について、主人公マルタは、「どうしてお互いにそれぞれの権利を比較検討して、理解し合おうとしないのでしょうか？それがうまくいかなければ、第三者が仲裁してはどうでしょう？なぜ両者でいつも『わたしこそ正しいのだ』と叫び続けるのでしょうか。」と述べている。

さらにマルタは、戦争をする前に「敵国」の人々をどう見るかという「偏見」の問題を指摘し、さらに教育の必要性も主張している。当時オーストリア人がイタリア人に対してどう考えていたかは、「イタリア人！なんと怠惰で不誠実、好色で軽薄、そして高慢な連中なのでしょう！」という表現から想像することができ

る。

アルフレッド・フリート（1911年ノーベル平和賞受賞）は『武器を捨てよ』を読んで感動し、平和運動に参加し始めた。さらに『武器を捨てよ』という名前の月刊誌を発行し始め、1899年まで発行を続けた。彼は1892年にベルリンでドイツ平和協会を設立し、1896年から1900年まで『月刊平和通信（Monatliche Friedenskorrespondenz）』を編集した。彼はズットナーの後継者となるが、ズットナーが原稿執筆や講演活動に集中できるよう励ました。彼はユダヤ系であったため第1次大戦中はオーストリアとドイツを離れ、スイスに移住しなければならなかった。

反ユダヤ主義の動きは、1880年代に始まったが、1891年ベルタの夫が「反ユダヤ主義防止協会」を設立し、彼女はそれを熱心に支持した。そのためズットナー夫妻は、国粋主義的カトリック教徒や反ユダヤ主義者を敵に回すことになった。翌年には嫌がらせの手紙が来るようになったが、「正しいことをしているという信念があったため、勇気を持ち続けることができた」とベルタは述べている<sup>6)</sup>。彼女は「迫害の犠牲者を迫害から守るには、たったひとつの誠実な方法しかありません—彼らの側に立つことです」と述べ、母親が子ども達を反ユダヤ主義的な考えから守ることを主張した。そのため彼女は、「女性にとって危険な人物」と見なされ、カトリックの新聞で「神から離れてしまった真の知的フェミニスト」と批判された。しかし彼女はそれを面白がって、その切抜きをノーベルに送った。

ベルタはキリスト教に疑問を抱き、『武器を捨てよ』の小説では、「戦死は神によって定められた運命」という考えと「戦死は祈りによって避けることができる」という考えの矛盾を指摘している。彼女のキリスト教や神の存在への疑問は、ダーウィンの『進化論』などの影響があると考えられることができる。

1896年12月10日に、アルフレッド・ノーベルが亡くなった。ノーベルは最初、ズットナーの平和への努力に対して懐疑的であった。彼は彼女に、次のように言っている。「私の工場の方が、あなた方の会議よりも早く戦争を終結させられるかもしれません。もし向き合う双方の軍隊が一瞬にして消し去られるような日が訪れたら、文明化したすべての国々は、おそらく恐怖に震えて自軍を撤退させるでしょう。」しかしズットナーは、武力ではなく、国際理解と国際協定によってこそ国際平和が実現できると考えていた。ベルタとノーベルの友情は20年間続いたが、ベルタは彼に平和運動に高額の寄付をするよう何度も働きかけた。1892年

ノーベルはオーストリア平和協会のメンバーになり、2000フランを寄付した。ノーベルの財政的援助がなければ、ズットナーは国際的平和運動に参加できなかったであろう。<sup>(7)</sup>

また、もしズットナーがいなければ、ノーベル平和賞は創設されなかったであろう。彼女は最初の数年間、受賞を逃したことにひどく落胆した。1901年の最初の受賞者は、列国議会同盟設立に参加フランスのフレデリック・パッシー (Frédéric Passy) と、国際赤十字を創立したアンリー・デュナン (Jean Henry Dunant) であった。デュナンはズットナーがノーベルに働きかけた重要性を高く評価し、オーストリア平和協会に多額の寄付をした。ズットナーはノーベル平和賞創設に自分が果たした役割をはっきり述べたため、ノルウェーのノーベル平和賞選考委員会を敵に回してしまった。1902年にはベルン平和ビューロー会長のエリー・デュコマン (Élie Ducommun) と、ベルンにある列国議会議務局長のゴバ (Charles Albert Gobat) が受賞した。そこで多くの人々が、ズットナーはノルウェーの国会で不当に扱われていると批判をし始めた。それでやっと1905年にズットナーはノーベル平和賞を受賞したのである。彼女は平和運動のためにも、彼女自身の生活のためにも、資金が必要であった。ところで、すでに1891年、ノルウェー政府は、ベルン平和ビューローのメンバーの国際会議への参加に補助金を出している。ノーベルがノルウェーの国会に財産管理を委託してノーベル平和賞を作った理由がここにあると、ズットナーは指摘している。<sup>(8)</sup>

1899年第1回ハーグ平和会議が、オランダのハーグで開催された。ロシア皇帝が提唱したものだが、その背景にはヨーロッパ戦争の愚かさや軍縮の必要性を主張した『将来の戦争』(The War of the Future) の著者であるジャン・デ・ブロッホ (Jan Bloch) の影響がある。彼は、1912年、スイスのルツェルンに世界で最初の国際戦争・平和博物館を創設した人物である。ハーグ平和会議には、各国政府高官、外交官、軍人が参加した。

ベルタは、近代シオニズム運動の創始者であるテオドール・ヘルツル (Theodor Herzl) の新聞『ディ・ヴェルト (世界)』の特派員としてハーグに赴いた。彼女はジャーナリストとして平和会議に参加したが、そこでは唯一の女性であった。それまでの十年間「平和会議」という言葉は嘲笑され、その参加者は「夢想家」または「空想家」と呼ばれてきた。しかし、そのように見なされてきた平和会議に政府の代表者が参加した

ので、ベルタは大いに感動した。平和会議は1899年5月18日から6月29日まで開催され、その期間の長さには驚かされる。会議では、軍縮、戦争に関する国際法の作成、仲裁裁判所について話し合われた。ベルタは、多くの政府代表者と話し、マスコミからしばしば取材を受けた。この6週間にわたる会議で、参加者の間に国際的な連帯感が芽生えてきた。

その結果、軍備縮小と戦時国際法についての論議はほとんど成果をもたらさなかったが、毒ガスとダムダム弾 (当たると裂けて傷を拡大する残酷な銃弾。インドのカルカッタ付近のダムダム造兵廠で製造されたことに由来) の使用が禁止された。そして、国際紛争処理協約が結ばれ、1901年にはハーグに常設仲裁裁判所が設置され、戦争が起こったら中立国が仲介をするようになった。ズットナーはハーグ平和会議で、紛争を武力で解決するのではなく、仲裁裁判所を活用して平和的に解決する重要性を主張した。彼女は、「ヨーロッパよ、早急に親交を結び、国家間の戦争を止めなさい。さもなければ次の紛争によって、ヨーロッパは破滅するかもしれません」と述べ、大規模な戦争の発生可能性を警告した。

1901年には、ロシアの実業家で平和主義者であったブロッホが亡くなった。既述のように彼はスイスのルツェルンに平和博物館を創ろうと努力し、それは1902年6月に開館した。ズットナーは「この (平和) 博物館は平和運動にとって、10回平和会議を開催したのと同じくらい重要です」とセオドア・ヘルツルに述べている。平和のための教育の重要性を認識していたズットナーは、平和博物館の役割を高く評価していたことがわかる。彼女は軍国主義的な支配者に問題があるだけでなく、人々の「無知と無気力」も問題であることを指摘している。平和博物館においては、人々が戦争と平和の真実について学び、平和の実現のために自分は何ができるのかを考えることが可能なことを、ズットナーは100年以上も前に感じていたことを覗かせる。

1902年12月10日、ベルタの夫アルトゥーア・フォン・ズットナーが亡くなった。二人の間には子どもがいなかったため、夫の死は大変辛いものであった。ベルタは生前夫と親密だった姪のマリー・ルイに嫉妬して苦しんだが、夫の死後彼女と和解をした。

1903年、モナコ公国のアルベール大公もズットナーの影響を受け、ヨーロッパの平和運動に参加した。モナコに「国際平和研究所」を開設し、国際法、国際紛争の平和的解決、平和主義者、戦争に関する統計などについて出版することを目的とした。同研究所は、国

際的な平和活動家が集まる場所になったが、ベルタは滞在一ヵ月後にホームシックにかかり、オーストリアに帰国している。

ベルタは6月9日に60歳の誕生日を迎え、世界中の平和主義者から祝福されて元気を取り戻した。それまではズットナー家の破産のため家を出なければならぬ状況で、生活費にも困窮していた。しかし60歳の記念行事で約2万クラウンが集まり、ノーベル平和賞の受賞に至るまで、生活費の心配がなくなった。当時の新聞のアンケート調査で、ズットナーは「最も重要な女性」に選ばれていた。

1904年には初めてアメリカに旅行し、ボストン世界平和会議に参加した。この時は、ノーベルの甥であるエマニュエルが旅費を出した。ズットナーは、その時、ワシントンでセオドア・ルーズベルト大統領に会った。その際、ルーズベルト大統領はズットナーに3つのことを約束した。第一に、日露戦争の仲介をして戦争を終結させること、第二に、イギリス、フランス、ドイツ、オーストリアなどあらゆる国に仲裁裁判所の件でアメリカと条約を結ぶよう提案すること、そして、第三にハーグ平和会議を招集することである。ズットナーにとって、アメリカはヨーロッパよりも平和運動の面で希望がもてる国になった。

1905年12月、ズットナーへのノーベル平和賞授与が認定され、1906年春クリスティニア（現在のオスロ）でノーベル平和賞を受賞した。ズットナーは「ノーベル平和賞を受賞した最初の女性」として、ノルウェーで大歓迎された。また、ズットナーは講演のためにストックホルムやコペンハーゲンも訪れ、大いに歓迎された。ところが、驚くべきことに、オーストリアの新聞ではほとんど報道されなかった。これについて、伝記を書いたブリジット・ハンナは、「オーストリア・ハンガリーが軍国主義的になっていたのである」と分析している。例えば、1895年、ベラ・スカルヴァ（Bela Skarva）という医師が「良心的徴兵忌避こそ、唯一の平和への道」というトルストイの考えを実践し、軍隊で戦うことを拒否した。その結果、彼は3ヶ月間監獄に入れられ、医師の資格を奪われた。このような風潮の中で平和運動を行なうには、大きな勇気が必要であったらうと想像することができる。

ボストンのアメリカ平和協会は、1903年に署名活動に取り組み、その結果マサチューセッツ議会で「ルーズベルト大統領に、国際会議を招集する権限を与える」という決議がされた。このことは1904年にセントルイスで開催された列国議会同盟で取り上げられ、1899年

ハーグ平和会議で明らかにされた課題に取り組む国際会議の開催が提案された。その結果、1907年にルーズベルト大統領が第2回ハーグ平和会議を召集し、26カ国の政府代表者が参加した。市民も数多く集まり、国際女性評議会（International Council of Women）では、20カ国で200万人の女性が軍縮を求める署名を集めたことが報告された。しかしハーグ平和会議では、軍縮の合意はなされなかった。

1911年、ベルタは『人類に関する重要な考察』という小説を出版し、「ラジウムを使った装置が発明されました。雲のある高い所からラジウムの放射線によって一瞬にして敵の全艦隊、軍隊、そしてすべての都市を破壊するのは、大変簡単なことです。『対立の開始』から48時間後、交戦国はお互いに破壊され、敵の国には建物も生き物は存在しないでしょう。」と述べ、今日の「核兵器の脅威」を想起させる予兆的な警告を行なった。そして、「破壊をする側につくかどうかを決めるのは、あなたです」と述べた。第一次世界大戦前には飛行機を使って空爆をすることは「信じがたい奇跡的な出来事」だったが、彼女は「空飛ぶ機械」つまり飛行機を使って戦争をする空爆の恐ろしさを予想していた。「迫害、奴隷化、権利の剥奪、大量破壊は、社会的政治的目的の達成のために、もはや受諾しうる手段とみなすことはできません。というのは破壊の可能性があまりにも大きくなったからです。空爆する人から自分を守ることができる唯一の方法は、その人の親友になることです。私達は重大な岐路に立っており、立ち上がるか地獄に落ちるかのどちらかなのです。」そして「戦争の勃発を防ぐために、何百万人もの人々の教育」の重要性を説いている。また、第一回のハーグ平和会議で強国が空から爆発物を落とすことを5年間禁止することを求めたが、彼女はさらに5年間禁止措置を継続することを求めた。

1912年、ズットナーは2度目のアメリカ旅行を行ない、女性運動の代表として高く評価された。アメリカの大実業家アンドルー・カーネギーもズットナーの要求に応じて高額の資金を出し、彼女の平和運動を支えた。彼女は6月にサンフランシスコで講演を行い、「万国の平和は、可能かどうかという問題ではなく、必要性の問題なのです。」と述べている。当時オーストリアの学校では自由な雰囲気なくなり、軍国主義的になっていることを指摘している。彼女はまた、真実を報道しないマスコミを批判し、平和主義者の独立した報道機関が必要であると述べている。

世界大戦の前、あらゆる国家が軍備拡張を進める中、

ズットナーは大規模な戦争が起きる危険性を警告して嘲笑された。彼女はオーストリアのユダヤ系作家であるシュテファン・ツヴァイク (Stefan Zweig) に、次のように述べている。「これから始まろうとしていることに、人々は気付いていないのです…なぜ若いあなたたちが、何もしないのですか？最も関わりがあるのは、あなたたちです！抵抗しなさい！団結しなさい！誰も耳を傾けない私たち数名の老婦人に、いつもすべてを任せてはいけません！」

彼女の死から1週間後の1914年6月21日、オーストリアの皇位継承者フランツ・フェルディナントが、サラエヴォで銃撃により暗殺された。その1ヵ月後、オーストリア・ハンガリー帝国はセルビアに宣戦布告をした。第一次世界大戦が始まり、その結果1000万人以上の人々が亡くなったのである。

1913年6月9日にベルタは70歳の誕生日を迎え、ベルンで開催された国際平和ビューローの会議や世界平和会議に参加した。1914年9月にはウィーンで次の世界平和会議を開催する準備をしていた。しかし、医師の診断によると、彼女は胃がんになっていた。6月21日ベルタはウィーンで死去したが、彼女の最後の言葉は「武器を捨てて。どうかみんなに伝えて。私はドウラゾ (Durazzo) へ行くわ」であった。(当時アルバニアのドウラゾの所有権を巡って、新たな対立があった。) 遺体は遺志により火葬され、ベルタの遺骨はドイツのゴータに安置された。戦争の勃発によって世界平和会議は開催されず、オーストリア平和協会の活動は、公式に禁止されてしまった。また、ズットナーの評論集『世界戦争予防のための戦い』が1917年に出版されたが、オーストリアとドイツですぐに禁止された。ズットナーが死ぬまで求めていた世界の平和は、実現するどころか、世界大戦が二度も勃発した。しかし未だに武力で紛争を解決しようとしている今日、彼女の功績を改めて振り返ってみる必要がある。

### 3. 反戦小説『武器を捨てよ』について

当時女性が書いた本には誰も注目をしなかったし、二流の文学と考えられていたので、ズットナーは匿名で本を執筆した。彼女は、女性、愛、社会、政治、宗教、文学、芸術、科学について、新聞や雑誌に幅広く執筆活動をした。しかし何よりも小説を書くことによって平和の実現に貢献したいと考えていた。彼女は、次のように述べている。

私は平和連盟のために活動したいと思いました。その理想を広げるために、本を執筆する以外にど

んな方法を見つけることができたでしょう。物語という形式を使えば、私の努力は最も効果的であると考えました。このようにした方が、論文よりきっと多くの読者を獲得できると確信していました。<sup>(17)</sup>

軍備拡張が行なわれる中で、ズットナーは「危険を作り出すのは(神ではなく)人間であり、そのことに注意しなければなりません。」と述べている。彼女は新聞で嘲笑され、「他の人が私を『滑稽な愚か者』と考えていることを知っている」と述べて憤慨している。しかし、ズットナーは、多くの書物を読み、何が真実であるのか、また何が正義なのかを考えていたので、様々な中傷に挫けることはなかった。彼女は普通の人々が平和を望んでいることをよく知っていて、次のように述べている。「普通の人々は平和を望んでいるし、平和に生きる権利をもっているのです。…積極的に戦争を求める人々は、ごくわずかなのです<sup>(18)</sup>」彼女の伝記を書いたベアトリックス・ケムフは、「当時彼女の警告が人々に理解されなかったことは、大変悲劇的なことである<sup>(19)</sup>」と述べている。

『武器を捨てよ』という小説では、主人公は軍人の家庭に生まれた伯爵令嬢のマーサ・アルトハウスである。彼女は結婚後夫が戦死をして戦争の実態を知ようになり、戦争の英雄を賛美する風潮や教育を批判するようになる。ヨーロッパにおける様々な戦争は、マーサに大きな影響を与えた。1859年、イタリア統一戦争中にマジェンタでフランス・サルデーニャ連合軍<sup>(20)</sup>がオーストリア軍を破った戦争、1859年のフランス軍とオーストリア軍との激戦地であるソルフェリーノでの戦争、1864年におけるプロシアとオーストリア対デンマークの戦争、1866年のオーストリア対プロシアの戦争(オーストリアは敗北)、1870~1871年におけるドイツとフランスの戦争である。最初の夫は1859年にイタリアのソルフェリーノで戦死し、2番目の夫であるフリードリヒは1864年と1866年の戦争に駆り出され、1866年に負傷する。マルタとフリードリヒは平和運動に参加するようになるが、1870年にはフランスで夫がドイツのスパイと間違えられて殺されてしまう。二人の夫を戦争で亡くしたマーサは深い悲しみの中で、愛国主義や名誉の戦死に対して強い不信感を抱くようになる。彼女は「戦争は、人間の価値と勇気を試している」という考えや、戦争では「神が助けてくれる」という考えを持つ教会を批判した。また兵士は祖国を守るために戦争をされると言われているが、別の目的、つまり所有地の奪い合いや君主の名誉のために使われて

いと分析している。マルタは愛する夫を戦争で失い、平和のために活動をしようと決心をする。その際の「武器」は正義と人類愛であり、まだ小さな「軍隊」であるものの「後に大きくなったものは、最初は小さくて平凡なことから始まる」と述べている。<sup>(21)</sup>

このような小説を出版社へ持って行くと、『武器を捨てよ』という題名の変更を求められ、また内容を変更するように求められたが、彼女は断固として拒否した。出版社から、「読者はこのようなテーマに関心をもたないでしょう」とか、「このような内容の本を現代の軍国主義国家で出版することは全く不可能である」と言われた。<sup>(22)</sup>『武器を捨てよ』は3年後の1889年にドレスデンの出版社からやっと出版されたが、出版社の予想に反してベストセラーになった。1905年にノーベル平和賞を受賞した時には37版が出版され、16ヶ国語に翻訳されてアメリカでも知られるようになった。1890年に哲学者のバルトロモイス・フォン・カネリ（Bartholomäus von Caneri）は、「これほど軍国主義がもたらす悲惨さ、戦争がなければ人生がどんなに素晴らしいのかを徹底的に描いた作品はない。」と述べている。<sup>(23)</sup>また1914年ニューヨークの週刊誌“The Nation”では、「この小説で、何百万人もの人々が戦争の恐ろしさを認識した」と評されている。<sup>(24)</sup>

『武器を捨てよ』は、1913年にデンマークのノルディスク（Nordisk）映画会社によって映画化された。ズットナーが亡くなる2ヶ月前の1914年4月20日にウィーンのアパートで、ズットナーの取材をしている。9月17日のウィーンの世界平和会議開会式で映画の初公開を予定していたが、第一次世界大戦の勃発によって実現できなくなった。

その小説が出版された当時、批評家は「取るに足りない」と述べていたが、人々の間で戦争と平和についての議論が始まり、争いを戦争によってではなく平和的に解決することができるのではないかと考えるようになったのである。

『武器を捨てよ』が出版された頃、フランス革命百周年を記念する世界平和会議が1889年6月23日から27日までパリで開催された。そこでは「自由、平等、博愛」の精神を明白にしたフランス人権宣言（1789年）によって、平和で新しい時代が有望になったことを世界の人々に思い起こさせた。1890年にはロンドンで世界平和会議が開かれ、軍国主義的風潮や軍備拡張競争を推進する政治と立ち向かうのに、この小説は大きな励みとなった。またこの小説は普通の市民だけでなく、著名人からも歓迎された。トルストイはこの小説を高

く評価し、「ハリエット・ストーが悲惨な奴隷の境遇を描いた『アンクル・トムの小屋』が奴隷制度の廃止につながったように、この小説が戦争をなくすことにつながることを願う」と述べている。<sup>(25)</sup>

この小説をめぐる色々な反応があったが、興味深いエピソードがある。ロンドン平和協会のメンバーであるフェリクス・モシェレスが小説を読んで感動し、1890年にベニスにいたズットナーを訪問した。小説が自伝の形式で書かれていたため、彼はベルタの夫が亡くなっていると思ひ込み、ベルタの夫に出会った時戸惑って「あなたは、亡くはないのですね」と言ったそうである。

この小説が大きな成功をおさめたためズットナーの人生は変わり、1891年にはオーストリアとイタリアで平和協会を組織した。既述のようにオーストリアでは2000人の人々が入会し、ズットナーは同年11月にローマで開催された第三回世界平和会議に参加した。女性の発言者としては初めてで、ベルンに置かれた国際平和ビューローの副議長に選ばれた。（現在の本部はジュネーブにあり、1910年にノーベル平和賞を受賞した。その後関係者13人がノーベル平和賞を受賞している。現在60カ国以上の国の265の平和団体が加入している。<sup>(26)</sup>

ベアトリックス・ケムフが述べているように、「たとえ一人になっても正しい道を指摘すべきである」と考え行動した勇氣あるズットナーの人生は、多くの人々を励ますことであろう。彼女は不屈の精神を持っており、新聞社によって原稿が拒否され続けても諦めることはなかった。彼女は何度も原稿が拒否されて落ち込んでいた仲間に、次のように言っている。「たとえば5社か6社の新聞社から拒否されても、7つ目の新聞社で受け入れるかもしれませんよ。」このことから、彼女の楽観性を知ることができる。

#### 4. ズットナーと日本の関係

ズットナーはヨーロッパ諸国がアジアを植民地にすることは犯罪であると批判し、1897年には国際赤十字を創設したデュナンと共に「極東の人々へ」という呼びかけを行なっている。その背景には日清戦争（1894—1895）、1895年の下関条約、ロシア、フランス、ドイツの三国干渉（日本は遼東半島を還付）がある。ズットナーはアジアの人々と亡くなる前まで連絡を取り合って戦争に反対し、仲裁裁判所を作るために国際的に活動することを呼びかけた。「野蛮な人々からの自衛は大切ですが、どこかへ行って市場を獲得するという口実で皆殺しにするなんて、私達が反対して闘って

いる野蛮さと同じことです。」<sup>(28)</sup>と述べている。

1903年12月に日露戦争が始まる前、ズットナーは戦争を防ぐために仲介をするよう世界各国政府に訴えた。1904年2月日本とロシアの国交が断絶すると、ヨーロッパ諸国政府に失望した彼女は、オーストリア平和協会の会長としてアメリカのルーズベルト大統領に仲介をするよう依頼する電報を打った。しかし、2月9日、日本は宣戦布告をすることなくすでにロシアの艦船を攻撃し、その電報は間に合わない状況であった。心を取り乱したズットナーに彼女の友人エストゥールネル・ド・コンスタン（1909年ノーベル平和賞を受賞したフランス人）は、次のように言っている。「過去30年か40年間、ヨーロッパは平和主義者の努力にもかかわらず、必死で日本を軍事化してきました。…そしてこの良き生徒が先生に敬意を表したいとむずむずしているのに、ヨーロッパは驚いているのです」<sup>(29)</sup>。ズットナーはオーストリア＝ハンガリー二重帝国のケーパー首相に対して、政府が「平和と人類のためにこれまでのような受動的な態度を止め、交戦国に対して積極的に仲介する」<sup>(30)</sup>ように求めた。しかし母国でも他国でも、耳を傾けてもらえなかったのである。国際平和協会は、日露戦争を止めさせるために可能なあらゆることを試みた。署名活動に取り組み、講演会を開催し、日露戦争に反対する記事を書いた。画家のヴァシリャー・ヴェレシチャギンは戦争の恐ろしさを描くためにロシアの戦艦に乗ったが、地雷が当たって800人の兵士とともに死亡し、そのニュースは平和主義者に大きな衝撃を与えた。

日露戦争の恐ろしいニュースを絶えず聞いていたズットナーは、「東アジアの戦争は、ひどいわ。でも私たちはそれに慣れてしまい、同情心という気高い感情が麻痺してきたのは最悪だわ」と述べている。1905年1月22日、ペテルブルクで憲法制定と戦争の終結を求めてロシアの10万人近い労働者が立ち上がり、ズットナーは希望を抱いた。しかし軍隊が発砲して多くの死傷者を出す「血の日曜日」事件が発生し、彼女はどのように対応をしたらよいのか戸惑った。その後、1906年5月にロシア帝国議会が開設され、その代表が1906年ロンドンで開かれた列国議会の会議に参加したが、皇帝ニコライ二世によって議会在解散され、ロシア第一革命のために第二回ハーグ平和会議は延期されてしまった。1906年4月、ズットナーは、会議の開催を願ってルーズベルト大統領に手紙を送った。彼女はすでに、1904年9月17日、ホワイトハウスで大統領に会っている。1905年9月5日、ルーズベルト大統領の斡旋

によって、日本とロシアの間でポーツマス条約が締結されたことを、ズットナーは非常に称えている。それはルーズベルト大統領がハーグ平和会議の精神、つまり仲介によって紛争を解決する重要性を認識して、実践したからである。その後、1907年、ルーズベルト大統領はロシア皇帝が公式にハーグ平和会議を招集するように働きかけた。しかし第二回ハーグ平和会議も戦争の予防にはならず、ズットナーはこれまで以上に平和のために活動をすることが求められるようになった。1899年に開催された第一回ハーグ平和会議と1907年に開催された第二回会議の間に軍力は50%増強され、しかも飛行機が戦争で使用される可能性が出てきたのである。

ズットナーはロシアのトルストイとも連絡を取り、1904年にトルストイが平和宣言を出して「殺すことを拒否するよう訴えたこと」を高く評価した。「戦争は大きな犯罪であるが、しかし多くの兵士も犠牲者である」とズットナーは指摘している。というのは、兵士は自分がしていることの意味がわからないまま、「従軍しなければいけない」という義務感だけで行動をしなければならぬからである。

ところで、彼女が68歳であった1911年4月4日の日記には、ズットナーが日本大使館で開かれた音楽会に行ったことが書かれているが、ズットナーは日本でどのように紹介されてきたのであろうか？

1910年1月31日、日本平和協会はズットナーに、小説『武器を捨てよ』の和訳の許可を求める手紙を出した。和訳した本を2000冊印刷し、1冊を1円20銭で販売したいと提案している。（手紙は、ジュネーブの国連図書館所蔵<sup>(31)</sup>）

また1911年2月および4月に雑誌『平和』が東京で出版され、小説『武器を捨てよ』の最初の部分を和訳し、日本で初めて紹介した（編集者兼出版者：富山接三、英語版編集者：ギルバート・ボウルズ、価格：10銭）。4月号は、ズットナーの特集号であった。1912年6月には、雑誌『太陽』<sup>(32)</sup>第18巻11号がズットナーの生涯について紹介している。（アルフレート・フリートの「平和運動の女傑」を和訳している）

2001年には、『武器を捨てよ』を紹介した糸井川修氏の論文が出版された。2003年以来、『武器を捨てよ』の和訳に筆者を含む数名が本格的に取り組んできたが、大部の小説であることもあって出版元が見つからないまま今日に至っている。



## 5. ズットナーの展示の今日的意義

ズットナーは世界大戦の被害の大きさを予言したが、第二次世界大戦後も戦争や紛争が数多く勃発している。ズットナーは、武力ではなく話し合いで平和的に問題を解決する重要性を主張し続けたが、1889年に出版された『武器を捨てよ』の小説は今日でも十分通用する。平和のために捧げた彼女の生涯を示した展示物は、多くの言語に翻訳されている。オーストリア経済社会問題博物館のホームページでは、ドイツ語で作成された展示物が日本語、英語、ロシア語、ウクライナ語、フランス語、ポーランド語、イタリア語、ブルガリア語、中国語、スペイン語などに翻訳されている。  
[http://www.wirtschaftsmuseum.at/wmdown\\_suttner.htm](http://www.wirtschaftsmuseum.at/wmdown_suttner.htm)

2001年のいわゆる「9. 11テロ事件」後、「対テロ戦争」と称してアフガニスタンを攻撃し、また2003年にはイラクを攻撃した米英中心の有志連合は、国連憲章の精神を否定した。国連憲章では、国際紛争の解決を武力行使ではなく、「平和的手段によって且つ正義及び国際法の原則に従って実現すること」<sup>(33)</sup>を明記している。国連憲章に違反したアメリカを支えている日本政府は、「国権の発動たる戦争と、武力による威嚇または武力の行使は、解決する手段としては、永遠にこれを放棄する」ことを明記した憲法第9条の精神を尊重すべきであると、筆者は考える。ベルタ・フォン・ズットナーが反戦小説『武器を捨てよ』を出版したのは1889年、つまり今から118年も前のことであるが、彼女が主張した戦争の放棄、紛争の平和的解決の重要性に、核兵器が存在している今日ますます耳を傾けるべきである。

日本では、オーストリア大使館の協力を求めれば、平和博物館、平和資料館、学校、大学など様々な所でズットナーに関する展示を行なうことが可能である。展示物はタペストリーになっているため巻くことが可能で、郵送が容易である。（タペストリーのサイズは、90×125センチで、19枚から成る。）今後多くの場所で活用されることを期待している。

また、さらに世界で平和や人権擁護のために活躍した女性に関する本（1000 Peace Women Across the Globe）<sup>(34)</sup>が出版され、展示物も作成された。この本も現在和訳中であるが、世界で活躍している女性について知るのに格好の本である。マスコミで報道された女性だけでなく、地道に活動をしている女性も含めて1000人が取り上げられている。

さらに、平和博物館や平和資料館で展示する際、地域で平和のために活動をしてきた女性の発掘、記録、展示物の作成などに取り組むことも重要であろう。ベルタ・フォン・ズットナーのように国際的に活躍した女性と同時に、地域で平和のために活動した女性に関する展示を行なうことは、大きな励ましを与えることであろう。



ズットナーと日本に関するパネル

### 《注》

- (1) Hamann, Georg ed. Ein Leben für den Frieden Austrian Museum for Economic and Social Affairs, 2005, ゲオルク・ハーマン編集「平和のために捧げた生涯」オーストリア経済社会問題博物館発行、2005年、糸井川修、中村実生訳
- (2) Hamann, Brigitte. Translated by Ann Dubsky. Bertha von Suttner: A Life for Peace. New York: Syracuse University Press, 1996, P. 8.
- (3) リーダーズによる。
- (4) Hamann, Brigitte. P.61.
- (5) Hamann, Brigitte. P.62.
- (6) Hamann, Brigitte. P.120.
- (7) Hamann, Brigitte. P.193.
- (8) Kempf, Beatrix. Translated from the German by R. W. Last. Suffragette for Peace: The Life of Bertha von Suttner. London: Oswald Wolff, 1972, P.175.

- (9) Hamann, Brigitte. P.217.
- (10) Hamann, Brigitte. P.253.
- (11) Reutter, Angelika U.& Rüffer, Anne. Translated from the German original by Salomé Hangartner. *Peace Women*. Italy: Ruffer+Rub, 2004, P.35.
- (12) Kempf, Beatrix. P.79.
- (13) Kempf, Beatrix. P.79.
- (14) Kempf, Beatrix. P.78.
- (15) Kempf, Beatrix. P.121.
- (16) Kempf, Beatrix. P.179.
- (17) Reutter, Angelika U.& Rüffer, Anne. Translated from the German original by Salomé Hangartner. *Peace Women*. Italy: Rüffer+Rub, 2004, P.20.
- (18) Kempf, Beatrix. P.169.
- (19) Kempf, Beatrix. P.121.
- (20) サルデーニャ王国は、イタリア統一を主導した王国。
- (21) Hamann, Brigitte.P.69.
- (22) Kempf, Beatrix. P.132.
- (23) Reutter, Angelika U. & Rüffer, Anne. P.21.
- (24) Hamann, Brigitte. P. xiii.
- (25) Reutter, Angelika U. & Rüffer, Anne. P.22.
- (26) <http://www.ipb.org/web/index.php>
- (27) Kempf, Beatrix. P.127.
- (28) Hamann, Brigitte.P.147.
- (29) Hamann, Brigitte.P.161.
- (30) Hamann, Brigitte.P.160.
- (31) ジュネーブの国連図書館に1910年日本平和協会が出した手紙が存在していることを、英国ブラッドフォード大学のDr. Peter van den Dungen (平和のための博物館国際ネットワークのコーディネーター) から知った。その後カメラマンに手紙を撮影してもらってCDで送ってもらい内容を読むことが出来た。
- (32) 国会図書館に「平和」と「太陽」の雑誌にズットナーに関する記事が掲載されていることを知らせて下さったのは、小島健太郎氏である。またその写真を撮影して下さり、それが「ズットナーと日本について」というパネルに載せられた。
- (33) 吉岡由典、新原昭治編「20世紀の戦争と平和」新日本出版2000 p.70
- (34) The Association 1000 Women for the Nobel Peace Prize 2005. SCALO: Zurich, Switzerland, 2005  
(高知大学非常勤講師)